

解答

問10

挿入する文の「しかし」という逆接の接続詞により、「はつきりと彰浩の耳に届いた」の反対の内容が前にあることがわかります。有一が彰浩に「信吾……病院じゃないか……」とため息みたいな小さな声で呟く場面に注目し、「どこか優い印象は、まだ有一次に纏わり付いていた。」の後に挿入できることを判断します。

問11

この場面は、テレビで活躍している甲子園球児の姿を見たくないのに、父親の前なので逃げ出すことを判断します。「見ている場面です。「どうにもならないことに拘って、こそそ逃げ出そうとする自分が卑小で哀れな者に思える。」とあることから、彰浩は自分が甲子園に出られないことに拘って出場選手を応援できない、ということを実感していることがわかります。そして自分が気持ちの小さな情けない人間に思えて、自分を哀れに感じるというのです。

問12

Aは、直前の「学校が廃校になることによつて甲子園に」から、彰浩たちが甲子園に「挑む」とさえ許されなかつた」状況をおさえます。Bは、甲子園球児と自分たちの立場の格差を表す「無限にも思える隔たり」が適切です。Cは、彰浩たちにとつて甲子園はどんな場所として位置づけられているかを考えて「手の届かない場所」を探し出します。

問13

Aは、「喧嘩をした」のは「信吾」とわかります。Bは、信吾が喧嘩をした理由を話した相手ですから「彰浩」です。Dは、「喧嘩をするような人間ではない」とCに言われたわけですので、喧嘩をしたDは「信吾」で、Cは「彰浩」ということになります。

問14

信吾が口をつぐんだのは、喧嘩の原因について話した後なので、工の「話すことが面倒になつていて」が不適切です。彰浩と同じように、テレビに甲子園が映つていたことが信吾の気持ちを不安定にさせたことを読み取ることが大切です。

問15

彰浩は、信吾も自分と同じように甲子園に対する深い思いを持つていたことを改めて知り、同じ思いを持つ者として同情しているのです。

問16

彰浩は信吾の気持ちを理解し、たとえ三人でも野球を続けていくことに意義を感じ、大好きな野球をすることによつて自分たちの未来に立ち向かつていこうと決意しているのです。

二 出典は、岩崎武雄「正しく考えるために」。

問1・2 漢字の読み書き。A, Fが訓読みの漢字の読み取り。B, Dは同音異義語に注意しましよう。

問3 語句の意味を問う問題です。a「いとまなくさせる」は、「いとま」が時間の意で、ひまな時間をなくさせるということで「かかりきりにさせる」が適切です。b「是認してしまう」は「是」がよいこと、正しいことを表すので、「よいこととして認めてしまう」という意味になります。

問4 副詞と接続詞の空欄補充問題です。Aは、「まちがいなし」の意の「たしかに」。Bは、「言うまでもなく」「はじめから、そもそも」の意の「もとより」が適切です。Cは、逆接で「しかし」。Dは、二つのものごとのうち、どちらかといえば、こちらがいいという気持ちを表す「むしろ」が入ります。Eは、理由を説明するときに使う「なぜなら」です。「なぜならから」のかたちで使われます。

問5 「自分自身の立場を見失つて」しまうこと」「自分自身の確固たる考え方を持たず」流行に流されることと筆者は述べています。そうならないためには、(工)「確固たる考え方」を持ち、みずから(ク)「考える」ことが必要なのです。

問6 「付和雷同」は、自分の考えをもたないで、人の意見にいいかげんな気持ちで同調し、いつしょに行動することです。「尻馬に乗る」は、人の言うことを信じて、かるはずみに行動すること。

問7 脱文挿入問題。脱文の「自分自身が平均的な世人一般的の立場に埋没してしまう立場です」の「立場」に注目して考えます。「世人一般的の考えにわけもなく同調し、世人のするのと同様の行動を行なう立場です」の言い換えであることに気づけばOKです。「句読点等の記号は含まれない」に気をつけましょう。

問8 「へー」段落冒頭の「現代は情報時代」とわれます、「へ2」段落の「情報時代」にわれわれに情報として与えられるのは「」、「へ4」段落の「情報時代は情報の氾濫によって」とあるように、この文章のキーワードは「情報」「情報時代」です。「へー」段落から「五字以内でぬき出しなさい」という設問の条件もヒントになつています。

問9 「われわれは他人の意見を『知る』ことによって、みずから『考えた』ような気になつてしまつ」とは、「知ることで満足してしまつて、みずから『考える』ことをしない」ということです。「それを防ぐために必要なことは何か」という設問ですから、「自分で考えることをする」という内容の選択肢を選びます。

問10 前の部分に「小学生はよく意見を発表するけれども、その意見は先生や世間の大人たちの意見そのまま」とあることから、小学生の意見がみずから考えたものではなく、みんな大人と同じであると述べていてわかります。

問11 次の行にある「こういう小学生は長ずるに及んでも、他人の考えを『知る』ことで満足し、『考える』ことをしなくなるおそれがあるからです」から考えます。筆者は「3」「4」段落で「知る」ことによって「考える」ことをしなくなる危険性について警鐘を鳴らしています。

問12 「へ4」段落の要点「経験的に確かめられる事実のみを重んずる実証主義的風潮がひろまる」と、考えることを軽視するようになるから(ウ)を、「へ2」段落の要点「情報(知ること)の増大が、考えることをしない(自己を見失つた)群衆をうみだす」から(キ)を選びます。